

# 「NABショー2016」に期待する ——衛星通信・衛星放送業界の動向——

神谷 直亮

今年の「NABショー」における衛星通信・衛星放送業界の3大テーマは、昨年に引き続いて、ウルトラHD(4K/8K)、ハイスーパーットサテライト(HTS)、モノのインターネット(IoT)と思われる。さらに、リオデジャネイロ・オリンピック・パラリンピックが控えており、このビッグイベントに関連してどのような展示とデモが見られるのか非常に楽しみである。

まず、4Kに関しては、SES、ユーテルサット、イスパサットなど既存のプラットフォーム・オペレーターの現状と動向の再確認が必要だ。現在、SES(本社、ルクセンブルグ)が提供する4K衛星プラットフォームを利用している番組提供事業者としては、「Pearl.TV」「Sky Deutschland」「NASA TV」「Fashion One」「High TV」「Insight UHD」が挙げられ、欧米市場に注力しているのが特色である。これらに加えて、2月からドイツの料理チャンネル「BonGusto」がSES UHD1プラットフォームで4K番組の放送を始めている。一方でSES社は、光ファイバーと衛星を駆使する統合グローバルサービスの構築を進めていると言われており、どのような伝送実績ができたのか問い合わせてみたい。

ユーテルサット社(本社、フランス)の4Kプラットフォームを利用している番組提供事業者は、「NTV Plus」「Tricolor」「DigiTurk」「Sky Italia」「SPI International(FunBox UHD)」「Fransat」の6社である。特色は、ロシアとトルコの4K放送に貢献していることと言える。今

回、同社のブースでは、アメリカでの戦略が話題になると思われる。

イスパサット社(本社、スペイン)は、2014年の「NABショー」でいち早くアマゾナス3衛星で「イスパサット4K TV」を立ち上げるという快挙を成し遂げたパイオニア的な存在だ。同社のプラットフォームには、現在「Drone Madrid」「Slow TV」「Avis Production」「TVE」「High TV」「Extreme Sports」「Red Bull Media」などが集結している。今年の注目は、地元スペイン・ポルトガル向けと北中南米向けの両4K専用プラットフォームの拡販戦略である。また、放送仕様、セットトップボックスのアップグレードなど、その後の進展状況を確認する良い機会になると期待している。

上述した3社の他に、4Kの展示とデモを行うと思われるのは、インテルサットとエコスターだ。ルクセンブルグに本社を移し、米ワシントンD.C.を活動の拠点にしているインテルサットは、昨年、「4K」「EPIC」「インテルサット・ワン」の3大戦略路線を前面に押し出していた。4Kに関しては、ロンドンのBTタワーから「インテルサット・ワン」光ファイバー回線を経由して、ロサンゼルス郊外のインテルサット・リバーサイド・テレポートまで伝送。ここからギャラクシー17衛星にアップリンクしてラスベガスの会場で受信するという複雑な伝送ルートでデモを実施して注目を集めた。今年は、どのような趣向を凝らすのか、また、どのメーカーの4Kコーデックを採用する

のかなど興味が尽きない。

エコスターについては、子会社のDish Networkが1月の「CES2016(家電見本市)」で「4K Hopper 3 DVR」と名付けたSTBを公開して「4K衛星放送サービスを今年第二四半期から実現する」と発表している。このサービスの詳しい内容とすでに販売している「Sling」や「Joey」など、同社が売り込んでいる他の受信機器との複雑な関係を解明することにしたい。また、本命の4K衛星放送が、IPTVやOTTによる他の4Kサービスの影響をどのように受けているのか、大局的な観点からの見方を聞いてみたい。

次いで、スポット・ビームを多用して大容量衛星通信サービスを目指すHTSに関しては、インテルサット、ユーテルサット、インマルサット、パイアサットの4社が展示と実演を行うと思われる。

インテルサット社は、1月29日に同社の「EPIC」第1号衛星となる「インテルサット29e」を打ち上げ、今年から本格的なHTSに挑む体制ができた。第2号機の「インテルサット33e」は2017年に打ち上げられ、グローバル・ネットワークが完成するのは2018年と思われるが、どのような具体的な戦略が示されるのか楽しみだ。ユーテルサット社は、すでにヨーロッパで「KaSat」によるHTSビジネスを展開している。今年に入り、採算ベースに乗ってきたと聞いているが、その成功の秘訣を確認してみたい。さらに、後述するパイアサット社との提携関係を強めるとの発表を行っ



写真1 今年も各社の4K TVの競演が楽しみだ。



写真2 出展が予定通り実現すれば、話題の中心になると思われるのは、NHKの8K中継車だ。  
(写真は、本年2月に開催された、NHK番組技術展に出展されたSHC-1の外観と中継車内)



ており、具体的な展開を探ってみることにしたい。

イギリスに本社を置くインマルサットは、昨年の2月と8月に第5世代の衛星を打ち上げて、着々とグローバルなHTSビジネス体制を固めている。今回、サービスの進展具合を確認する絶好の機会と考えている。また、この第5世代衛星に対応するKaバンド陸上可搬局も出展すると思われる、つづさに見てみたいと思う。

バイアサット社は、昨年、HTSの新しいアプリケーションとして「Exede」と名付けた放送局向けの車載局を出展して来場者の耳目を集めた。テレビ局の中には、運用がバイアサット衛星のスポット・ビームと、これに対応するゲートウェイに依存するので、緊急事態発生時には伝送能力が限界を超えるのではないかとという危機感を持っていると聞く。これに対しバイアサット社が、どのような対応策を考えているのか確認する絶好の機会になると思う。

既述の衛星通信・衛星放送事業者以外で、今回出展が予定されているのは、カナダのテレサット社とロシア衛星通信会社(RSCC)である。

テレサット社は、昨年11月に最新の「テルスター12V」衛星を日本のH-2Aロケットで打ち上げたばかりである。この衛星には、52台のKuバンド中継器が搭載され、スポット・ビームによるきめの細かいサービスを行うと宣言している。どこがユーザーになったのか、その展開ぶりを聞いてみたいと思う。

RSCC社は、2015年3月にエクスプレスAM-7、9月にAM-8、12月にAMU-1と3機の衛星を矢継ぎ早に投入した。念願だったアメリカとロシア間のブロードバンド回線も実現している。今年の「NABショー」で同社が何を前面に押し出すのか、話を聞くのがたのしみだ。特に4Kプラットフォームに関する戦略を聞いてみたいと思う。

さらに、1月の「CES2016」以来、熱い視線が注がれているIoTについて、どのような意欲的な取り組みがなされているのか、各社の対応が気になる。「NABショー」という性格から、IoT最大手の衛星通信事業者であるイリジウムとオーブコムが出展する可能性は少なく、動向を聴取する唯一のチャンスはインマルサットのブースと考えている。さしずめ航空機のエンジン監視や大型建設機械の稼働状況など、IoTビジネスの現状把握に努めたいと思う。

上述した衛星通信・衛星放送事業者による室内展示以外に、「NABショー」の楽しみとして、屋外展示があげられる。中央ホールと南ホールの間に「アウトドア・モバイル・メディア」特設会場が設けられ、毎年のように大型中継車と多様な車載局が集結する。今年の興味は、4K対応のシステムがどのように導入されているかの一点に集中している。今回予想される車載局の代表的な出展者としては、アクセラレイテッド・メディア・テクノロジー (AMT)、コプハム・サトコム、スカイウエア・テク

ノロジー、オンコール・コミュニケーションなどがあげられる。特に注目されるのはAMT社で、同社が開発したバイアサット衛星とLiveUでセルラー・ネットワークにアクセスするハイブリッド車載局の最新版に興味を引く。

さらに、一昨年から屋外展示会場で目立つようになったのが「ドローン」による空撮システムである。今年は、どのような最新デバイスが公開されるのか、来場者の楽しみの一つになっている。

最後に、実現すれば脚光を浴びること間違いなしと思われるのが、NHKが製作した8K中継車だ。ソニー製の「SHC-2」は、「第50回スーパーボール（現地時間2月7日、サンフランシスコ郊外のリーバイス・スタジアムで開催）の会場で使用された後、ニューヨークのリンカーンセンターで2月16日に開催される秋吉敏子ジャズコンサートの撮影に臨むという。本稿執筆時点では、まだ最終確認が取れていないが、リオデジャネイロに搬送される前に、もう一度アメリカ大陸を横断しラスベガスの「NABショー」に出展する時間は十分にあると思われるので、切に展示が実現するよう願っている。

Naoakira Kamiya  
衛星システム総研 代表  
メディア・ジャーナリスト